追悼エッセイ

伊藤和行先生の思い出

吉田 善哉*

In Memory of Professor Kazuyuki Ito

Yoshinari YOSHIDA

私が伊藤先生に初めてお会いしたのは，京都大学文学部 2 回生の頃に履修した科学史の講義でのことです．生物学と人文学に漠然とした興味がありつつも何を専門に学ぶべきかわからずにいた私は，講義の一覧を眺めていて目に留まった「科学哲学」「科学史」という未知の単語に興味を惹かれ，伊藤先生の講義を受講しました．ティコ・ブラーエの天文学やガリレオの運動論，ダーウィン主義とメンデル遺伝学の間の論争や一遺伝子一酵素説について学び，自分にとって当たり前になっている世界観を離れて過去の科学者たちの思考や議論を辿るのは，難しくも新鮮で刺激的な体験でした．すぐに私は，科学哲学と科学史をもっと深く学び，自分の中にあった科学への関心と人文学への関心の両方を同時に追求していきたいと考えるようになりました．その後，学部 3 回生で科学哲学科学史専修に配属され，修士課程を経て博士課程の途中で京都大学を離れて留学を開始するまで，伊藤先生には約 5 年間指導していただきました．科学史講義との出会いがなければ，私は全く別の道を歩んでいただろうと思います．私が科学哲学の研究者を志すことになるきっかけの一つ（それも，とても大きなきっかけの一つ）を与えて下さったのが伊藤先生でした．

伊藤先生からは，過去の科学の文献を精読する方法や科学史の考え方・方法論など多くのことを学ばせていただきました．伊藤先生の演習は文献を一行一行訳していくという昔ながらのスタイルで，専修の卒業生の方や聴講生の方などもいつも参加しており，緊張感はありながらもどこかゆったりとした時間が流れていて，私は毎週楽しみにしていました．けれども，具体的な技術や方法以上に私にとって何よりも重要だったのは，科学の内容について深く学ぶべしという，科学について研究する者としての態度を教わったことだと思います．科学史や科学哲学の研究をするのであれば，何よりもまず対象とする個別の科学分野における理論や研究実践についてよく知らなければならない．伊藤先生の指導には常にこうした意識が感じられました．そして，私が

* ミネソタ大学哲学科博士課程

この教えを実践することを伊藤先生はいろいろな形でサポートして下さいました．修士課程 1 回生のときには，（私の研究対象である）発生生物学の実験に触れる機会として，大阪府にある JT 生命誌研究館でのサマースクールへの参加を勧めていただきました．このサマースクールでは，発生生物学史における金字塔である両生類胚の移植実験を実際に経験することができました．また，同じく修士課程 1 年目の冬に，理学部の高橋淑子先生から発生生物学の研究室で 1 年間過ごしてみないかという誘いをいただきました．伊藤先生に相談したところ，一も二もなく賛成いただき，この経験がもっとも実り多くなるようにといろいろなアドバイスをいただきました．このように，私が理学研究科や生物学の研究機関に足を運び，生物学者と関わり，生物学の研究実践に触れることを伊藤先生は大いに推奨し，手助けして下さいました．こうした経験を通して，私の研究関心や発生生物学に対する見方は大きく変わりました．現在私が行っている研究もその延長線上にあります．

伊藤先生は科学史に限らず様々な対象への知識と関心をお持ちで，万事に視野が狭くなりがちな私は先生と話すたびにその幅の広さに圧倒されていました．修士課程の頃は研究や事務的な作業に関する相談のためによく先生の研究室を訪問させていただいていましたが，相談するうちに会話がいろいろな方向の雑談に展開することもしばしばでした．話題は学問のこと，望遠鏡などの実験器具のこと，かつての大学と今の大学の違い，文学のことなど様々でした．お忙しい先生の邪魔をしていけないとは知りつつ，私はそういったお話を聞けるのも楽しみにしていました．特に印象に残っているのは，アーシュラ・K・ル＝グウィンの小説『ゲド戦記』についてお話したときのことです．私がこの小説を好きであることを知ると，伊藤先生は科学史の観点から見たル＝グウィンの小説のおもしろさを聞かせて下さいました．先生はこのときの会話を覚えていて，研究室の引っ越しをお手伝いした際には所有されていた『ゲド戦記』を譲っていただきました．他方で，私の知識や関心が偏っているせいで伊藤先生にはしばしば心配されてしまっていました．あるとき，私があまりに世情に疎い発言をするので「吉田君はもっと夜遊びとかしたほうがいいんじゃない？」と言われてしまったのも懐かしい思い出です．

伊藤先生から（直接ではないのですが）いただいた言葉で，もう一つ深く印象に残っているものがあります．修士課程の頃の私は研究の方向性に関してずっと悩んでいました．当時の私はどの科学分野を研究対象にしたいかははっきりしていたものの，この分野へのアプローチとして科学哲学と科学史のどちらに主軸を置くか決めあぐねていたのです．最終的に私は科学哲学のほうを選ぶことになったのですが，そんな折に

別の大学院生から，「吉田君は科学史が向いてるんじゃないかと思うんだけどね」と伊藤先生が言っていたと教えてもらいました．この発言の詳しい文脈や真意はわかりません．深い意味は何もなかったのかも知れません．おそらく伊藤先生からすれば何気なく呟いた一言だったのでしょう．けれども，科学史を専門とする伊藤先生にそのように言っていただけたことは，私のことをどこか認めていただけたような気がして嬉しかったのを覚えています．

現在，私は米国ミネソタ大学にて博士論文の最終章の執筆に取り組んでいます．所属しているのは哲学科であり，取得しようとしているのは哲学の博士号です．けれども，私はいつも自分の専門は「哲学」ではなく「科学哲学・科学史」だという認識で研究してきましたし，それは今後も変わらないと思います．博士論文では，発生生物学における知識の一般化について，モデル系の使用や様々な図表の役割などの研究実践の分析を通して論じています．留学してから学んだことを多く取り入れているのはもちろんですが，根底にある発生生物学の実践への注目と関心は，伊藤先生のもとで自由に過ごした時間に培ったものです．研究対象とする科学分野の実践について深く知るべしという教えは今までもこれからもずっと私の中にあります．伊藤先生に教わった者の一人として，先生の名に恥じぬ研究を行っていければと考えています．

伊藤先生と最後にお会いしたのは，2019 年の初めに一時帰国に合わせて京都大学を訪問した際でした．研究室のセミナーで当時取り組んでいた論文の内容を発表させていただき，その後に面談にて近況を報告させてもらいました．その時は，その面談が先生とお話する最後の機会になろうとは思いもよりませんでした．博士号を取得した後で改めてご報告とご挨拶に伺い，またいろいろなお話を聞かせていただくのを楽しみにしていましたが，それが叶わなかったことが心残りです．

伊藤先生，約 5 年間ご指導いただきありがとうございました．ご冥福を心よりお祈りいたします．